

令和8年度 全国大学書道学会（武蔵野）大会

研究発表要旨集

令和8年9月12日（土） 於.. 武蔵野大学

研究発表 午前1—① 10:30 ～ 11:00

米芾における顔真卿の書評価の二面性

—「篆籀気」と「古法無遺」をめぐって—

北京師範大学大学院博士後期課程 熊 俊屹

顔真卿の書は、宋代以降、その忠義の人格と結び付けられながら受容されてきた。しかし、米芾による顔真卿評価には、相反する側面が見られる。米芾は「争坐位帖」などの行書の書を「篆籀の気（篆籀気）」を有するものとして高く評価する一方、楷書については「俗品」と評価し、「古法を失われた（古法無遺）」とまで批判した。日本では、大森信徳は北宋書論の審美観を論じ、中村薫は米芾の「篆籀の気」について分析している。中国では、曹宝麟は米芾の「篆籀の気」論を朱長文説の継承とする。これらを踏まえると、米芾による顔真卿書法評価の二面性については、その由来・文脈と評価の要因になお検討の余地がある。

本発表は、米芾の『海岳名言』『宝章待訪録』などに基づき、「篆籀の気」は篆書・籀文造形的特徴ではなく、古雅・純朴・天然という理想的美意識を含む概念であったことを論証する。米芾は顔真卿の行書に見られる自然な筆勢や偶然性を、古法として評価した。これに対して、米芾の楷書批判は、顔真卿その人への否定ではなく、「挑踢」の筆法や字形の均質化、さらには北宋における顔体の実用化傾向に対する批判であった。米芾にとって、顔氏の行書は「古」に通じる自由な表現である一方、楷書は俗流化の風潮の中で画一化された様式として認識されていたのである。

以上により、本発表は米芾の顔真卿評価を古雅と俗化の二面性として捉え直し、その審美理念の一貫性と北宋書壇への批判意識を明らかにしたい。

研究発表 午前1—② 11:05 ～ 11:35

董其昌『戲鴻堂帖』の資料価値の再検証

—顔真卿作品を例として—

淑徳大学書学文化センター研究員 上野あゆみ

董其昌（一五五五—一六三九）は卓越した書画の実作・理論の実力から、没後、清朝初期まで影響力を持ち、四九歳時に『戲鴻堂帖』（全一六巻）を刊行した。同帖は「同時代の法帖と重複作品が少ない」「希少価値のある二王作品の選出」等、唐代以来第一の名家と評された、董の自任が見える内容である。しかし、収録内容に特化した『戲鴻堂帖』研究は、管見の限りではほぼ見られない。

よって、本研究では『戲鴻堂帖』内「顔真卿作品（全九作品）」を例に、董が顔作品を収録した背景を追究し、また『戲鴻堂帖』が同帖以降の法帖に与えた影響について考察を行うこととする。

研究方法は、先ず『戲鴻堂帖』内の顔作品の概要を整理する。次に、董が顔を是認するに至った背景について「王法受容の変遷」「書論に基づく顔真卿評」「明代の顔真卿評」の観点から分析をする。そして『戲鴻堂帖』前後の碑帖目録から、顔作品の収録状況の点検を行う。中田勇次郎氏『顔真卿書蹟集成』・宮崎洋一氏の顔真卿諸論考も基礎資料として活用させて頂く。本研究を通し、『戲鴻堂帖』から見える董其昌の顔真卿観を明らかにすると共に、同帖の資料価値の再検証を試みたいと考える。

研究発表 午前1—③ 11:40 ~ 12:10

甲骨文・金文からの音楽に関する民俗学的起源の考察

大阪教育大学教育学部教授 出野文莉(張莉)

本論は中国における音楽の発祥とその情操的な意味合いを甲骨文文字や金文などの古代文字から紐解くことを目的とする。音楽の起源については確証がない。自然の音、例えば鳥や虫の鳴き声や風の音や水の流れる音など人間の耳に届いて情緒に触れる音が原初となって、音楽が創造されたのは容易に想像できる。特に、鳥の鳴き声は大変美しく、旋律を伴うので音楽の創成には大いに役立ったと思える。鳥はあの世とこの世を飛び交う霊的な動物とされ、「無…甲骨文𠩺」字から発展した「舞」字は鳥の飛ぶ姿を真似て舞う人の姿を文字にしたものである。舞は神を楽しませるためにあり、後に芸能として歌とともに、人を楽しませるためのものとなる。「缶(𠩺)」は物を入れる土器であるが、これを手で敲いたことが原初の楽器となる。「楽」は甲骨文𠩺「𠩺」につくり、舞踊の時に手鈴を振って、その楽音を以て神を楽しませるためのもの。その姿が今の日本の神社の舞として風習が残っている。「歌」は祝祷の成就することを神に祈り、その時に発する声を歌という。歌はその言霊を以て、呪能を発揮するのである。それ以外の音楽の発生要因として、「言」が考えられる。白川静氏によると「音…金文𠩺」は「言…甲骨文𠩺」の口(口:サイ)内に横線を引いたものであるという。つまり、人の「言」に対して神が反応するときには「音なひ」があるという。「音」は中国古代において神の世界にあるものとされていた。

研究発表 午前2—④ 10:30 ~ 11:00

再考・広武將軍碑

四国大学大学院 文学研究科 日本文化・書道文化専攻 藤本陽

本研究は、五胡十六国時代の前秦で建立された「広武將軍碑」(368)における独自の書風について、その全貌を解析することを目的とする。碑文の内容や「草隸」と解釈されることが多い書風の研究が見られる中、筆者はこれまで、卒業論文においても同碑を研究題材に挙げ、その四面それぞれを詳細に分析する中で、「書丹者と刻者」に着眼して検証してきた経緯がある。今回はその経験を踏まえ、同碑が今日の書道史において「銘石書」に分類される現状を鑑み、改めてその特異な書風の成り立ちを多角的に考察したいと考えた。

具体的には、まず「銘石書」の定義を再確認した上で、三国、五胡十六国、東晋の石刻資料を、後漢の碑刻分類の基準をもとに整理した。さらに、当時の前秦の領土地図から、その支配下にあった漢中地方の磨崖碑群に着目して、書風の比較検討を行った。その結果、これまで筆画の表現として捉えられてきた独特な造形や筆法の背景を、明確な根拠をもって説明できることが分かった。また、同時期の肉筆史料との比較においては、石刻と肉筆という媒体が持つ意義の違いから詳細な比較は難しいものの、当時の書きぶりから共通点を見出そうと試みた。

以上の研究成果から書風の核心に迫りたいと考える。

研究発表 午前2—⑤ 11:05 ～ 11:35

日本の近代における元代書法の評価について

—趙孟頫を中心に—

京都芸術大学非常勤講師 込山誉実

本論文は、日本の近代（ここでは明治維新から第二次世界大戦終戦期までとする。）において、元代の書法がどのように受容されてきたのか、その実態を明らかにすることを目的とする。江戸期においては、唐様の書家によつて、二王といった魏晋の書のみならず、元や明の書法が多く学ばれ尊ばれた。しかし、明治期に入ると、楊守敬らが携えた古碑帖の流入によつて、秦漢や六朝の書法に注目が集まり、碑学の趨勢が顕著となった。そのような状況下において、明治期における元代の書法に対する認識には一体どのような傾向が見受けられるのか、また江戸期の受容態度とどのような差異があるのか、考察を深める。

その方法として、明治期の能書家の書論や文献、出版物などの記述の分析を行い、元代書法と、その中でも代表的な人物である趙孟頫の書に対しての言及を整理し論述を進める。例えば比田井天来は趙孟頫の書を俗書と批判しつつも、実用の書としては高く評価しており、また犬養毅も同様に趙孟頫の書を俗と認識しつつも、学書の導入としては最適と主張している。また、当時の日本における書法史の記述を振り返ると、「元明は書道に於て殆んどいふべきことがない。」（川谷尚亭《書道史大観》）といった意見が散見され、元代の書法が軽視されていた現状が窺える。このような元代書法の受容内容を整理、検討することで、当時の書学思想の一端を明らかにする。

研究発表 午前2—⑥ 11:40 ～ 12:10

陳垣の石刻史料観

—『史諱举例』より見る石刻史料の扱い方を中心に—

相模女子大学非常勤講師 早川桂央

陳垣（一八八〇—一九七一）が著した『史諱举例』は「避諱」という習俗を体系的に論じ、「避諱学」という新たな学科体系を構築した記念碑的著作であり、今日の避諱研究においても最も重要な先行研究の一つである。『史諱举例』に提示される避諱用例は文献史料からの抽出が主であるが、石刻史料の利用も認められる。発表者は旧稿にて陳垣の書法観と文墨の交流を考察したが、陳垣は書法に通じ、繆荃孫の芸風堂收藏拓本を利用できる立場にあったことから、石刻史料にも高い見識を有していたと考えられる。

しかし陳垣の石刻史料の使用には、いくつかの疑問が認められる。それは「雁塔聖教序」や「集王聖教序」といった著名な碑文に現れる避諱用例を看過しており、また石刻史料の利用に統一性が見られないという点である。ともすれば史料を十分に精査していないとも感じられる。

本発表では、陳垣が『史諱举例』に使用している石刻史料を分析し、陳垣の石刻史料に対する所見の一端を明らかにしたい。具体的には、陳垣が使用している石刻史料の傾向と、先行の金石書からの引用箇所とを整理して、史料を使用する際の特徴を考察する。また陳垣の他の論考や年譜等の資料から、学問的な局限性を検討し、発表者が感じている疑問を明らかにしていきたい。

以上の検討を、石刻史料を用いた避諱研究の一つの指針とし、今後行う避諱研究の礎石としたい。

研究発表 午後1—⑦ 13:10 ~ 13:40

昭和美術館蔵 伝松花堂昭乗筆『山家心中集』について

法政大学兼任講師 山口恭子

『山家心中集』は、中世の歌人西行の家集である。妙法院蔵伝冷泉為相筆本、宮本家蔵伝西行自筆本、宮内庁書陵部蔵御所本、宮内庁書陵部蔵池底叢書本、国立公文書館内閣文庫蔵本等の諸本が知られており、これらの伝本研究をはじめ、成立論、作品論、ならびに伝西行自筆本を中心とした書風に関する検討などが、主に国文学、および書字の分野において積み重ねられてきた。

昭和美術館には、寛永の三筆のひとりである松花堂昭乗（天正一二—寛永一六年（一五八四—一六三九）筆とする極札を付す『山家心中集』が所蔵される。管見の限り、これまでこの昭和美術館蔵本が研究の俎上に載ることはなく、その存在も広くは知られてこなかったものの、『山家心中集』の伝本のあり方や享受の様相を知るうえで重要な資料と考えられる。また、すでに指摘されているように、池底叢書本の奥書には昭乗筆本をもとに転写した旨が記されており、昭乗筆と伝えられる昭和美術館蔵本は、池底叢書本との関連においても検討されるべき伝本といえるだろう。

本発表では、昭和美術館蔵『山家心中集』をとりあげる。書誌的・文献的特徴を明らかにし、該本が伝西行自筆本の本文、ならびに書風的一端を忠実に転写したものであることを示す。さらに、書写者を昭乗とする極札の妥当性を検討したうえで、池底叢書本とも比較しながら、『山家心中集』諸伝本における昭和美術館蔵本の位置づけについて考えたい。

研究発表 午後1—⑧ 13:45 ~ 14:15

清代の書人による漢碑の臨書を収録した刻帖に関する研究

—銭泳『攀雲閣帖』『攀雲閣臨漢碑』をめぐる—

東京学芸大学特任准教授 城間圭太

宋代の『淳化閣帖』以降、名跡を収録したさまざまな刻帖が刊行された。清代になると周代の金文や漢代の隸書といった金石の摹刻の他、当時の書人によるそれらの金石の臨書を収録した刻帖が見られるようになる。本稿は、なかでも清代の書人による漢碑の臨書を収録した刻帖に着目し、その特徴や当時における価値を明らかにすることをねらいとする。

漢碑の臨書を収録した刻帖のうち、銭泳による『攀雲閣臨漢碑』（嘉慶二三年）はその代表的な作例であるといえよう。同帖については盧慧紋「碑与帖的交会——銭泳『攀雲閣帖』在清代書史中的意義」において内容分析がなされ、碑学書法の実践におけるその意義が論じられた。興味深いのは『攀雲閣臨漢碑』の約三〇年前に、同じく銭泳による『攀雲閣帖』（乾隆五四年）が刊行されていることである。両帖においては、臨書された漢碑の数量、臨書された箇所（文言）、そして原拓本に見られる欠損部分をいかに再現するかといった臨書方法に相違が見られるが、盧氏をはじめ先行研究ではこの点について論じられてこなかった。

本稿では、両帖を比較した上で、跋文等の内容も踏まえ、刊行目的や想定する使用者層が異なったものと考察する。その上で、清代に刊行された同様の刻帖を概観し、銭泳の二帖がその中でいかに位置づけられるのかを把握する。さらに、このような「碑」の臨書や摹刻を収録した「帖」と碑学の「尊碑抑帖」といった思潮との関連、整合性についても検討したい。

瀧精一による書画一致論の構造

—東洋書画と表現主義の交点—

島根大学准教授 柳田さやか

瀧精一（一八七三—一九四五）は東京帝国大学美術史学講座初代教授を務めた美術史家として知られる。画家の瀧和亭の長子で、明治三四年（一九〇一）から没年まで美術雑誌『国華』の主幹を務め、同四二年（一九〇九）から東京帝国大学講師の職に就いた。特に絵画史を専門とし、主な単著に『文人画概論』や『日本画の本質』がある。

その一方、瀧は書への造詣も深く、書に関する著述を多く残し、書と画の関係性に関心を寄せた。例えば、明治三十六年（一九〇三）には『国華』に「書の美を論ず」を掲載して書の美の性質に言及し、大正一五年（一九二六）には同誌の「書道と美術」にて書は美術であると論じ、書画一致論を唱えた。明治期以降、西洋の美術概念移入によって書の非美術論が生じ、美術史の側から書を評価することは少なかった状況を踏まえると、瀧の存在は稀有であり、その動向は特筆されるものである。

本発表では、瀧の書に関する著述、瀧と書道界の接点、当時盛行していた東西芸術論を検討することによって、瀧の書画一致論の特徴とその背景、影響を考察する。瀧は大正期に東洋書画と表現主義の間に交点——作者の主観表現を見出した上で、その主観表現の最たる芸術として書を再評価し、書の要素として運筆を重視した。瀧の書論は、当時および次代の書道界に影響を与えることになるが、その理論の基盤は明治期にすでに築かれていたものであり、瀧の書論が先見性と波及性を有していたことを指摘する。